

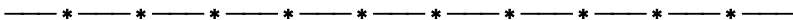
👁️👁️ みどころ

何と大胆な邦題を！『影武者』と聞けば誰だって、パルム・ドール賞を受賞した黒澤明監督の名作『影武者』(80年)を思い出すが、本作の影武者とは？

『三国志』は映画ネタの宝庫。ジョン・ウー監督の『レッドクリフPart I』(08年)『レッドクリフPart II』(09年)は「赤壁の戦い」に焦点を当てたが、チャン・イーモウ監督は本作で「境州争奪戦」と呉の都督・周瑜に焦点を当てたうえで、新進の女性脚本家と共に脚本を大幅に修正。オリジナルな物語に作りかえ、人物もセットも戦闘方法もオリジナルなものに！

1人2役の物語は何かと面白い。『キングダム』(19年)では早い目に影武者が命を失ったが、さて「影武者と権力者、そして2人の間で揺れる女の物語」たる本作では・・・？

ホウ・シャオシエン監督の『黒衣の刺客』(15年)と同じく、モノクロの水墨画の美しさの中で展開される圧倒的なチャン・イーモウ流美学を堪能したい。



■□張芸謀監督が黒澤明監督に挑戦?! ■□

私は張芸謀(チャン・イーモウ)監督最新作の原題が英語の『SHADOW』と聞いてビックリ。そして、邦題が『SHADOW 影武者』だと聞くと、日本人の映画ファンなら誰でも黒澤明監督の『影武者』(80年)を思い出すはずだ。黒澤明監督の『影武者』は勝新太郎降板の話題を呼んだが、中国第五世代の旗手であり、かつ中国映画のハリウッド進出を牽引してきた1951年生まれの張芸謀監督の『SHADOW 影武者』とは?今年3月

に公開された『キングダム』(19年)は原泰久原作のコミック本1～6巻を映画化したもの。そこでは若き日の秦の始皇帝、嬴政の影武者になる漂が登場し、冒頭から面白いストーリーの牽引役になっていた(『シネマ43』274頁)。その時代は紀元前3世紀だ。

しかして、本作冒頭、沛国の「朝議」の席で、都督の子虞(ダン・チャオ)が若き王、沛良(チェン・カイ)から叱責される姿が登場するが、それは一体なぜ?本作をしっかりと観賞するためには、まずは本作の物語の歴史上の位置づけのお勉強をしっかりとする必要がある。そして、その上で、張芸謀監督が黒澤明監督の向こうを張るかのように、本作で「影武者」をテーマにした理由と、その問題意識をしっかりと確認したい。

■□■ 炎国 vs 沛国、都督らの設定の原型は『三国志』だが ■□■

呉宇森(ジョン・ウー)監督の『レッドクリフ Part I』(08年)、『レッドクリフ Part II』(09年)は、三国志の中の「赤壁の戦い」をテーマにした面白い映画だった。その主人公は金城武演じる蜀の国の諸葛孔明だったが、その対抗馬になったのが呉の国の都督である周瑜。勢力を伸ばし呉への侵攻をもくろむ魏の曹操に対抗すべく、呉と蜀の同盟を目指す男たちのドラマはメチャ面白かった。また、それと同時に同作では、姉の大喬と共に「江東に二喬あり」と言われるほどの美貌を誇る周瑜の妻・小喬と、後に劉備の妻となる呉王・孫権のおてんばな妹・尚香ら女性陣の活躍も目立っていた。そのため、同作はホントに面白いエンタメ大作に仕上がっていた(『シネマ34』73頁、79頁)。

本作のパンフレットにある「PRODUCTION NOTES」によれば、「影武者」をテーマとした本作の元の脚本は『レッドクリフ』と同じく『三国志』を忠実に描いた内容だったらしい。しかし、従来の“三国志作品”“中国の歴史を再現する作品”などとは全く違う作品を志していたチャン・イーモウ監督は、才能溢れる若い女性脚本家のリー・ウェイを共同脚本に加え、18か月をかけて物語を練り上げて、“影武者と権力者、そして二人の間で揺れる妻の物語”に変えていったそう。ちなみに『三国志』における「赤壁の戦い」前後では、荊州の争奪を巡って蜀の劉備玄德と呉の孫権との対立があった。しかして、本作の境州争奪戦は、その荊州争奪戦をアレンジしたものだ。また、弱小国・沛国から境州を奪った強国・炎国の武将として境州を守っているのが楊蒼将軍で、その勝負に敗れ、境州奪還を誓ったのが沛国の都督・子虞だ。しかして、沛国の都督・子虞は呉の都督・周瑜のアレンジだ。したがって、その妻・小艾(シャオ・アイ)(スン・リー)は周瑜の妻・小喬のアレンジだから、絶世の美人である上、琴の名手に設定されている。

なお、『レッドクリフ』では「赤壁の戦い」や「荊州争奪戦」で一時的に曹操の軍門に下っていた関羽のウエイトが大きい上、関羽の息子・関平も一定の存在感を見せている。そのため、本作でも炎国の将軍・楊蒼の息子・楊平が父親とともに境州を守る武将として一定の存在感を見せているから、そこにも注目!

■□■ 穏健派 vs 開戦派の対立は？影武者の役割は？ ■□■

私は近時、華流のTVドラマに凝っており、『ミーユエ 王朝を照らす月』『賢后 衛子夫』『王女未央』『独孤加羅 皇后の願い』『麗王別姫 花散る永遠の愛』等を観ているが、そこでは各国の軍事・外交を巡って開かれる“朝議”の姿が興味深い。そのスタイルは大国でも小国でも同じで、朝議に参列している大臣たちは、王に対して自由に意見を述べることができるのが原則だ。20年前に強大な炎国と休戦同盟を結んだ沛国の民は今、いつまた炎国が攻めてくるのかと脅える日々を送っていた。そのため、今こそ境州の奪還を目指すべしという開戦派が日々勢力を増し、炎国との休戦同盟の継続を目指す穏健派との対立を深めていた。沛国の王・沛良は穏健派で、開戦派のリーダーが都督の子虞だ。

冒頭の“朝議”は、勝手に炎国の楊蒼將軍に境州での対決を申し込んだと報告する子虞が沛王から叱責されるシーンだが、それでもなお、子虞は堂々と開戦論を主張したから、アレレ……。そこで、子虞に対して明確に反論できない沛王は怒りの矛先を変え、琴の名手と称えられる子虞の妻・小艾との合奏を命じたが、子虞はそれすら拒否。これでは、王の体面すら保つことができないのでは……？

ちなみに、スクリーン上のそんな展開を観ている私を含めてすべての観客は、朝議の席で沛王・沛良からの叱責に対して堂々と渡り合っている都督・子虞はホンモノの子虞だと思はず。また、そこで沛良が子虞をトコトン糾弾できないのは、子虞が知略に富み、民からも尊敬されているためだけではなく、先王が早死にしていまい、家族は妹の青萍と2人だけになってしまった沛良が王位に就けたのも子虞の尽力のおかげという負い目があるからだ。しかし、そんな子虞の行動によって、今や境州争奪を巡る穏健派 vs 開戦派の対立は激化するばかり。しかして、今私たちがスクリーン上で観ている子虞はホンモノの子虞？それとも影武者？もし影武者だとすれば、彼はいつから影武者デビューしているの？また、小艾役のス・リーは、『ミー・ユエ 王朝を照らす月』の主役で登場している美人女優だと知ってビックリ。なるほど、実力のある美人女優には次から次へといい仕事が舞い込むものだ。ちなみにミー・ユエ（半月）は秦の始皇帝となった嬴政の高祖母で、「宣太后」と称された女性。このことは、近時出版されて人気を呼んでいる塚本青史作の『呂不韋伝 パシレウス』（NHK出版）でも詳しく書かれている。

■□■ ホンモノの都督・子虞はどこでナニを？ ■□■

黒澤明監督の『影武者』では、武田信玄に瓜二つの死刑寸前だった盗人を影武者として養成し、信玄の死を外にはもちろん内部にも隠してその影武者を活用していた。また、『キングダム』では嬴政のそっくりさんである信を発見した王都の大臣である昌文君が、信を嬴政の影武者に育て上げるべく日夜訓練に励んでいた。

しかして、子虞の叔父が子虞の影武者を養成したのは、子虞が8歳の時にその父親が子

虞の前で斬られたのを見て子虞の身を案じたためだ。子虞は「わしが8歳の時、父親が殺された」と言っていたから、それから約20年の間、飢えて行き倒れていた当時8歳の男の子を子虞の影武者にするため訓練を続けてきたことになる。いやいや、本作の導入部を見ていると、この影武者は今や訓練を受ける立場ではなく、既に都督・子虞に成りすましてその役割を立派に果たしているようだ。したがって、子虞が王の命令にもかかわらず琴の合奏をしなかったのは、弾かなかったのではなく、弾けなかったためだ。影武者としての訓練も、さすがにそこまではできてなかったらしい。さらに、ずっと影武者と偽りの夫婦関係を演じている子虞の妻・小艾も、とっさに「境州が戻るまで琴は弾かないと天に誓った」と言い放って頑なに琴を弾くことを拒否したから、2人のチームワークは万全だ。それはともかく、このように子虞の影武者が沛国の都督の役割を堂々と演じているのは、一体なぜ？ホンモノの都督・子虞は一体どこでナニをしているの？

そんなシークエンスが終わると、やっと沛王の前から退出した子虞（影武者）が、秘密の通路を通して秘密の部屋に入っていくので、こりゃ要注意。しかして、その中にいたのがホンモノの子虞だが、20年前に楊蒼將軍との勝負に敗れた彼の身体は今や痩せ細り咳き込んでいる状態だった。つまり、楊蒼將軍との敗北後も境州奪還を誓い、影武者の養成に全力をかけてきた子虞は、その心意気こそ今もキープしているものの、もはや自分で動く身体ではなくなっていたわけだ。

『仮面の男』（98年）では、レオナルド・ディカプリオがルイ14世とフィリップの一人二役を演じていた。それと同じように、本作でもダン・チャオがホンモノの子虞と影武者の一人二役を演じている。しかし、ハッキリ言って日本人の私には、ホンモノの子虞と影武者を同一の俳優が演じているとは到底思えない。パンフレットを読めば、彼は最初に撮影した影武者役を演じるについては、2か月で体重を72キロから83キロへと増やして逞しい肉体美を完成させ、更に4か月の間、1日6時間のアクショントレーニングを毎日行ったそうだ。逆に、その後、痩せさらばえた子虞役を演じるについては、1日の摂取カロリーをわずか800キロカロリーに制限し、たった5週間で一気に20キロの減量を果たしたそうだ。したがって、本作ではホンモノの子虞と影武者との落差に注目するとともに、俳優ダン・チャオのプロに徹した役づくりに拍手！

■□■子虞、沛王決裂後の双方の行動は？■□■

ちょっと薄気味の悪いホンモノの子虞の隠れ部屋では、子虞がかつて楊蒼將軍から受けた刀傷がないことによって、こいつは影武者だと見破られるのを避けるために、影武者の胸にあえて刀傷を付けるシーンが登場する。これは、いよいよ境州奪還計画を進める子虞が、影武者に、「楊蒼を殺せば、自由の身だ」と約束し、穏健派の沛王との決裂を決意したためだ。朝議の翌日、子虞の指示通り、影武者が炎国の楊蒼に宣戦した己に敵罰を下すよう沛王に迫ると、沛王は子虞を無官にするとともに、「今後、境州奪還を口にする者は斬首

だ」と宣言。ところが、それに対して子虞も「私はもう一介の民。境州に行き、楊蒼と対決しても、殿とは無関係」と言い返したから、2人の決裂は決定的に。

ここまでの流れを見ていると、沛王はいかにも2代目のボンボンで凡庸な国王のように見えるが、そこで子虞の刀傷を見せてくれと言いだめたから、こりゃ意外に策士・・・？しかも、上半身裸になって左胸の傷を見せた影武者に対して、「その刀傷は新しいものようだが、なぜか？」と質問したから、彼の目はかなり鋭い。さあ、そんな手に汗握るやりとりの中、影武者はどう答弁するの？それはあたな自身の目でしっかり観てもらいたいが、飢えて行き倒れになっていた8歳の時に子虞の叔父によって拾われ、影武者として訓練されてきた男の子も、今や武芸面のみならず知恵の面でもなかなかのものに・・・。

それはともかく、どんな相手も三太刀で必ず討ち取るという青龍刀の達人・楊蒼との対決に向けて、子虞の待つ館へ戻った影武者は更に武術を磨かなければならないが、現時点での勝てる確率は自称でも3割程度らしい。そのため、影武者は子虞が編み出した、傘を武器にした対抗技を磨いていくことに。チャン・イーモウ監督の『HIRO (英雄)』(02年) (『シネマ 5』134頁) や『LOVERS (十面埋伏)』(04年) (『シネマ 5』353頁) ではワイヤーアクションが目立っていたが、本作は原点に戻り、極限までリアリティを追求するアクションに徹しているので、それに注目。

他方、子虞を追放した沛王は、炎国との和平のために妹の青萍を楊蒼の息子・楊平に嫁がせようとしたが、楊平からは「姫を側室に迎えたい」との返事が。とことん和平派の沛王はそれもやむなしとしたが、そこで我慢も限界となったのが家臣の田戦 (ワン・チェンユエン)。しかし、沛王の考えを改めるよう諫言した田戦も沛王の怒りを買って官職を解かれてしまったから、さあ、彼はどうするの・・・？

■□■出陣前夜。そこに見る男女のドラマは？■□■

宮本武蔵は二刀流を自分一人だけの剣術の鍛錬の中で発見した。また、『HIRO (英雄)』における趙国の刺客「無名」が10年の歳月をかけてマスターしたのは「十歩必殺」の剣だったが、これも自分一人で編み出したものだ。それに対して、本作の影武者の場合、傘を武器にした技は子虞のアイデア。また、その習得がままならない影武者に対して小艾が出したアイデアは、女性のような柔らかな動きを取り入れること。それをやってみるとうまくいったから万々歳だが、この訓練を見ていると、影武者が楊蒼に対抗する傘の技を習得できたのは子虞と小艾のおかげということがよくわかる。しかし、宮本武蔵も無名も自分の編み出した必殺剣を何度も試したうえで本番に臨んだが、影武者の場合は実力者・楊蒼との勝負は本番での一発勝負のみ。さあ、そのクライマックスの行方は？

それが本作最大の見どころだが、他方、出撃前夜には何かとエポックメイキングな出来事が起きるもの。例えば、『ホテル』(01年) では、出撃前夜に富屋食堂の女主人・鳥浜トメに対して、「きっとホテルになって帰ってくる」と言い残した宮川三郎が鹿児島の知覧基

地から特攻に飛び立ったところ、その日の晩、ホントに一匹のホタルが富屋食堂を飛び回っていたそう（『シネマ2』34頁）。また、『連合艦隊』（81年）では妻の身体を美しいままで残しておきたいとする夫が、あえて出撃前夜の初夜の契りを避けるシーンが登場していた。しかして、本作に見る出撃前夜の影武者と子虞の妻・小艾は・・・？影武者と小艾はずっと夫婦役を演じていたが、それはあくまで偽りのもの。したがって、寝所では2人は別々に眠り、影武者も身分の差をしっかりと認識していた。そのため2人は手を握り合うことさえなかったが、さすがに出撃前夜ともなると・・・？ちなみに、谷崎潤一郎の小説『鍵』では、性的不能の夫が美しい妻のセックスを鍵穴から覗いて興奮していたが、今や性的不能状態になっていると思われるホンモノの子虞は？本作ではそんなスケベな興味もチラホラ・・・。

■□■こんな戦闘シーンはじめて！集団戦も個人戦も！■□■

『レッドクリフ』でも琴を演奏するシーンが見モノの1つだったが、本作のそれはもっと迫力がある。日本で琴の名曲と言えば『春の海』だが、本作で子虞と小艾が合奏する琴のシーンは非常にドラマティックなものだから、必見！また、本作のクライマックスになる、楊蒼・楊平父子が守る境州に、子虞に協力することになった田戦率いる数十名の鉄傘部隊が突入する集団戦は、これまでのどの映画でも観たことのないほどユニークでオリジナリティに溢れているうえ、ダイナミックで華麗なものだから、それに注目！

パンフレットの「PRODUCTION NOTE」によれば、境州争奪戦の撮影のために壮大なスケールのセットが組まれたらしい。とりわけ、傘の武器に乗って坂道を一気に駆け下りるシーンの撮影のためだけに、何もなかった広場に全長60m、落差8mの巨大な町並みが、6か月をかけて建築されたそうだから、すごい。さらに、雨・霧・水で物語のテーマを表現するためのスタッフの奮闘も並大抵ではなかったらしい。

他方、念願通りやっと迎えた影武者と楊蒼との個人戦では、影武者が一太刀、二太刀と楊蒼の青龍刀による攻撃をかわしていくから、それに注目！さらに、影武者が女性特有の柔らかさを取り入れた見事な鉄傘のさばき方に注目！この上、楊蒼の三太刀をかわすことができれば、それは史上初の快挙だが、それを達成すれば2人の勝負は引き分けで終わり？楊蒼の方はそんな考え方だったようだが、対する影武者は？しかして、影武者が見事に楊蒼の三太刀必殺の技をかわした後、さらに訪れる、どちらかが死ぬまでの個人戦の展開は？

■□■境州争奪戦勝利後の沛国のあり方は？権力の所在は？■□■

よく考えてみれば、本作に見る境州争奪戦と、影武者と楊蒼との再度の個人戦は、20年前に楊蒼に敗れた沛国の都督・子虞の個人的な恨みに基づくもの。個人戦の行方はともかく、境州争奪戦の行方は、地の利、人の利、天の利によるものだが、影武者や沛王から罷免された子虞の忠実な部下・田戦の活躍によって境州を守る楊蒼・楊平父子をやっつけ、

境州を争奪できたから沛国は万々歳だ。また、個人戦も団体戦も勝敗は一瞬のことで、負ければそれで終わりだが、難しいのは勝った後の国の治め方。つまり、権力の所在をどうするかだ。『クレオパトラ』(63年) 観ると、エジプトを征服した後のローマは、クレオパトラと結ばれたシーザーの部下アントニーと、独裁者となったシーザーの養子オクタビアン の確執が強まる中、ついに両雄の決戦になっていった。

境州争奪戦終了後、最初に浮上してくるテーマは、影武者に約束していた「楊蒼を殺せば、自由の身だ」という約束を子虞が履行するの否かということ。私に言わせれば、影武者がいなくなった後、ホンモノの子虞が都督に復帰して無事職務を遂行できるかどうかには不安はあるものの、影武者との約束を履行するのに何の支障もないはず。しかし、そこで子虞は美しい妻・小艾と影武者との関係が気になった(障った)らしい。その結果、境州争奪戦終了後、子虞は影武者に対してどんな仕打ちを・・・？

他方、ひたすら炎国との和平を願い、妹を側室として楊平に嫁入りすることさえ認めた沛王も、今や沛国の勝利に大喜び。それを自分の手柄のようににはしゃいでいたうえ、傷ついた影武者の暗殺に向かわされた子虞の手勢をやっつけて影武者の帰還を助けたが、それは一体なぜ？そしてまた、いつの頃からかホンモノの子虞と影武者がいることに気付いていたらしい沛王は、ホンモノの子虞の殺害を実行したから、事態は今、影武者の帰還を迎え入れた沛王の思惑通り・・・？

本作のラストでは、境州争奪戦終了後の沛国のあり方、権力の所在を巡って事態が二転三転してく姿をじっくり注目したい。私が近時、いつも観ている華流TVドラマ『ミーユエ(王朝を照らす月)』や『賢后 衛子夫』『王女未央』『独孤加羅 皇后の願い』『麗王別姫 花散る永遠の愛』でも王位を巡る権力争いが面白いが、本作ラストでは日本人には想像できないような熾烈な権力争いの姿が登場するので、それをしっかり観賞したい。しかして、境州争奪戦に勝利した後の沛国の支配者は一体ダレに？

2019(令和元)年9月13日記